

Title	島谷先生の思い出
Sub Title	
Author	高鳥, 正夫(Takatori, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1978
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.51, No.2 (1978. 2) ,p.124- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	島谷英郎先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19780215-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

島谷先生の思い出

高 鳥 正 夫

昭和五二年一月二四日午後、島谷英郎先生のご逝去の知らせを、私は九段のホテルで催された古書展に出かけているときに受取った。この日、先生のご病状が良くなかったので、倉沢教授と城西大学の小宮山君にお願ひしてお見舞してもらったところ、おひる過ぎから安定してきたとの電話連絡があつた。そこで、塾の図書館でも購入を予定していた古書もあつたので、夕方から古書展に出かけたところ、受付にいた顔見知りの書店の人から、先生のご逝去のことを知らされた。それから直ぐに日吉の先生のお宅へ伺つて、病院から帰宅される先生のご遺体をお迎えした。長かつた闘病生活とご入院のために、お体は随分やせておられたが、その端正な容貌に変わりのなかつたことが、かえつて私共には淋しく思われた。

この数年間、先生は腎臓を悪くされて入院されている日が多かつた。そして、退院されていても、透析治療のために病院へ通われることが多かつたようである。慶應病院に入院されてい

た折も、就職部長を兼務された期間が長く、職員の方とおつき合いも広かつたためか、教員ばかりでなく、職員の方もお見舞に見えていたようだつた。私がお見舞した時には、腎臓を悪くするとなかなか直らないので、ベッドで横になつていて、今度は足が弱くなつて困るという話をされておられた。その折も、お見かけしたかぎりではお元気なようであつたが、今から考えると、病状は少しずつ進んでいたのであろう。

その後、ご自宅にも近いということで、日吉の井田病院に入院されることとなつた。先生のご病状を心配する法学部教員の意向を受けて、井田病院に倉沢教授と一緒にお見舞したことがあつた。医師の話では、ご病氣はなかなか直り難いとのことであつたが、その時も患者の面会のために使用している部屋まで出かけられ、しばらくお話をうかがうことができた。この時には、病氣のために食物は制限されているが、少しなら食べてもいいということで、ご自宅へ出かけられた折におすしを食べてみたなどと話されていた。後から、先生と親しかつた職員の方から話を聞くと、先生はご一緒に食事に出ようとか、喫茶店まで出かけたなどといわれることがあつたとのことであるが、私共にはそのような話はなさらなかつた。

ご病氣が重くなられた去年の十一月、日吉のキャンパスに出かけた折に、庶務課長の角坂さんから、島谷先生が医師の中に

私に似た方がおられるためか、高鳥君が見舞に来てくれたとおつしやつているということも耳にした。そこで商法関係の諸君とも相談して、なるべくいつもご病状が分るようにお見舞していこうと打合せ、また、先生のゼミのお弟子さんで、現在は他大学で商法を講義している研究者、及び、経済界で活躍している諸兄にも、先生のご病状を連絡した。こうして、先生とお別れするまでの数週間、多くの人がお見舞する機会を持つことができたが、これらの人々の話を総合してみても、先生は痛みや不満を訴えられることがなかつたという。このことは、ご病状の経過にもよることではあるが、奥様はじめご近親の方にお尋ねしても、ご病氣について、ほとんど苦痛を訴えられたことはないとのことであつた。

島谷先生は慶應義塾大学教授として、法学部に三〇年あまり勤務され、昭和四五年四月から大学名誉教授になられたが、この間、昭和二八年から二九年にかけて、イギリス、フランスなどにご留学になつておられる。この留学には英修道名誉教授と一緒に出発され、当時は汽船でインド洋を廻つてヨーロッパに出かけられるご旅行で、帰国後の両先生から、今はとり壊された第一研究室の辞書室で、留学談をうかがつたことが昨日のことのように思われる。先生のご専攻は海商法を中心に保険法にも及び、「英法における堪航能力(本誌三三卷二頁)などの

論文のほか、「海商法・保険法」(評論社)、「基本商法概説」(泉文堂)のご著書もある。そして、明治学院大学その他の大学の兼任講師として商法を講義しておられる。また、昭和二三年から日本海法学会理事、航空法学会理事に就任され、学界においても広く活躍されていた。

塾内においては、昭和二一年から二二年にかけて、学生部長に就任されている。学生部長というと、学生ストの盛んな時期においては、しばしば大学側と学生との間に板ばさみになったり、スト学生から不信任決議をつきつけられる地位でもある。温厚な島谷先生が学生部長を兼務されたことがあると話す、法学部の若い教員仲間はよく勤まりましたねという顔付をする。けれども昭和二一年という時代は、太平洋戦争が終つた翌年で、三田の山にはまだ戦災のあとが大きく残っており、学園に再び帰つてきた学生達は将来の見通しに不安をもつていた時代である。そこで、先生が学生部長として、こうした若い学生達の良き相談相手となり、気軽に話しかけられ、学生からも頼りにされたことと思つている。

先生のご経歴のうちでも忘れることのできないのは、昭和三五年から約一〇年間、就職部長として兼務されたことであろう。就職部のお仕事ぶりについては、庶務課長の角坂さんがお詳しいが、就職を前に不安と動揺を隠し切れない学生諸君にと

つて、先生は良き相談相手であつたのみでなく、会社の側からも信頼された就職部長であつたことである。先生がお亡くなりになつた後のお通夜やご葬儀には、何人かの職員の方の手を借りなければならなかつた。そこで、前に述べた角坂さんにお願ひしたところ、心よく引受けていただいたが、お通夜の日に集まつた職員の顔ぶれを眺めると、教務部の方があり情報センターの人がおり、また、庶務課の人がいる。ふだんはあまり連絡がないだろうと思われる人々が、実によく協力してお通夜の準備を下さつた。後からうかがうと、この人達はいずれも島谷先生が就職部長時代の仲間とのこと、こうした職員をもつた先生が羨ましく思われた。

このほか、塾内での先生のおつき合いのうちには、昭和二一年から四五年まで、正味二四年に及ぶ空手部の部長のお仕事があり、また、海洋研究会の会長をしてこられたこともよく知られている。また、島谷研究会というゼミのOBや現役からなるグループも一大勢力をなしているが、人数が多いにもかかわらず、強いまとまりをもつているとのことである。先生が就職部長をしておられた頃、ご専攻が商法関係の科目であつたことや、そのお人柄を知つて、志望者はいつも大勢集まつてきた。先生はこれらのゼミ入会の志望者のカードを手にしながら、何回か繰返して読まれた後、なかなか選抜は難しいですねといわ

れて、よく全員をそのまま採用されたということを、先生に近かつた倉沢教授から聞いたことがある。

法学部の教授会や各種の会合において、先生が大演説をされたり、白熱した議論に加わつて、激しい口調で話されるのを聞いたことがない。いつもひかえ目に、静かに議論の行方を見守るといふ態度をとつておられた。数人の親しい先生方もおられたようであつたが、それ以上に、同じ考え方の者が集まつて、先生をかつき出すというようなこともなかつた。その意味では、先生はその端正な容貌と共に、毛並みの良さを感じさせる都会的なお人柄の持主であつた。名誉教授になられた後に、私共、後輩の商法関係者が、一夕、銀座でお食事をして歓談したことがあつたが、先生のお住いが日吉で、お身体もそれほどお丈夫でなかつたので、食事後、自動車を留意してお送り申し上げた。私共は、それからもうちよつと、席を改めて洋酒でも飲もうかという時間だつたせいか、皆で自動車までお送りしたところ、もう帰されてしまうのかというような表情をされた。先生はその表情はもう見られない。